

志望理由書に ふさわしい文体とは

志望理由書には一定の文体があります。体裁が整っていることも重要な評価点ですので、しっかり添削しましょう。

字数の少なさは特に指摘したいポイントです。目標にすべきは、制限字数の9割。最低でも8割は必要です。志望理由や将来の夢の掘り下げが足りずに字数不足となるケースがほとんどですので、単に「9割を目標に」と書くよりは、どの点でもっと字数を増やすべきか指摘すると、生徒はより改善しやすいでしょう。また、思いつくままに文章を書き始めると、文字数が不足しやすくなり、かつ構成のバランスも悪くなります。よい文章を書くために、まず下書きをすることを勧めてもよいでしょう。Webコンテンツ「志望理由書完成シート」を使えばフレームに沿って下書きができます。

また、文体は論理的かつ知的に仕上げることを意識させましょう。口語表現、会話調の文章、俗語・略語は控えたほうが無難です。例えば部活は「部活動」が正式な表現です。「だから」「してあげる」も、志望理由書としてはやや会話的な表現です。違和感のある表現は「部活動だ」とよりわかりやすい」というように、やわらかい表現で指摘してください。なお、常体（だ・である）と敬体（です・ます）については、統一されているのであればどちらを用いても問題ありません。

ただ、志望理由書に求められるのはあくまでわかりやすい文体です。体言止めや倒置表現は文章を華やかに見えますが、読み手に読解を任せてしまう表現でもありますので、できるだけ使用を控えるべきです。同様に「だろうか」「かもしれない」といったあいまいな表現も避け、断

定できることは言い切るよう指導してください。

表記や文章のルールは注意すべきことが細かく、かつ多いです。下記の「特に指摘したい よくある表現例」をご確認ください。

▲ 特に指摘したい よくある表現例

- ・常体（だ・である）と敬体（です・ます）が混在している
- ・口語表現の使用（～してあげるなど）
- ・略語の使用（部活、プレゼンなど）
- ・極端に字数が少ない
- ・体言止め、倒置表現の使用
- ・あいまいな表現が多い

わかりやすい&簡潔な 表現を心がけて

体裁に加えて、伝わりやすい文章を書くことも意識させましょう。大学に出すからといって、変に難しく考える必要はありません。誰が読んでもわかる平易な文章を心がけてください。

見落としやすく、かつすぐに意識できることとして「文章の長さ」が挙げられます。一文が長過ぎる文章は主述関係がわかりづらく、意味を把握しづらくなります。一文一意というように、一つの文章にたくさんの内容を詰め込まず、適宜文章を切らせるようにしましょう。「しかし」など、接続詞を積極的に使うようにすると改善しやすいです。

次に「段落の数」も重要となります。文章と同じで、1段落に入れる内容は1テーマとするのが基本です。制限字数が600字であれば3、4段落で構成するのが目安となります。1段落で最後まで書き上げている志望理由書をよく見かけますが、そうした生徒にはどこで段落を区切るべきか教えましょう。それで

も構成に迷う場合は、先輩や同級生のよく書けている例を見せて、基本となる型を身に付けさせてください。

大学パンフ取り寄せでもらえる『志望理由書作成に役立つ情報誌』でも先輩の志望理由書を読むことができます。

直接文章とは関係しませんが、文字は丁寧に書くことを意識させましょう。人に読んでもらうものなので、丁寧に書くことが大切です。実際の入試で志望理由書を読む教員たちも人間ですから、きれいに書かれているというだけで目に留まる可能性は十分あります。字がきれいか、読みづらかだけで合否が決まるわけではありませんが、少しでも評価につながる可能性があるのですから、なるべく丁寧に書くよう指導しましょう。

文章の長さ、段落構成、そして字形を意識するだけで、読み手への伝わり方はグッと変わります。いずれもすぐに変えられることですので、ぜひ添削の視点に取り入れてください。

▲ 特に指摘したい よくある表現例

- ・一文が長過ぎる
- ・段落が少ない（600字の場合、全体で3、4段落が目安）
- ・判読が難しいほどに字形が乱れている（“シ”が“ン”に読めるなど）
- ・必要以上に難解な表現、持って回った言い回しになっている

できていたら褒めたい 伸ばすべきポイント

- ・丁寧な字で書けている
- ・適切な段落構成ができている
- ・読みやすい、わかりやすい表現を心がけている
- ・簡潔な表現を心がけている
- ・接続詞の使い方が上手
- ・制限字数の8割以上の文字数で論述できている

